

ミニ・シンポジウム

いま、あらためて考えるアイヌ・アート

— 地域・民族・伝統・想いの表象とその未来 —



「アイヌ・アートの現在に見る「伝統」とジェンダー」公開研究会

日時：2016年3月21日（祝日）13：00～17：30 開場12：30

会場：アイヌ文化交流センター 大会議室

〒104-0028 東京都中央区八重洲2丁目4-13 ユニゾ八重洲2丁目ビル 3階

◇地図はアイヌ文化交流センターHP掲載の案内図をご覧ください http://www.frpac.or.jp/cultural_exchange/map.html
 ◇当日は東京駅から外堀通りを銀座方面に進み、みずほ証券の手前で左折して最初の細い道に続くユニゾ八重洲2丁目ビル建物の通用口からお入りください。12：30分～13：30まで、係りの者が通用口側に立ちご案内いたします。*祝日のため正面入り口（1階スターバック側）は施錠されています。
 ◇遅れてご参加の方は、以下の電話番号までご連絡ください。お迎えに参ります。*090-5339-2286
 ◇会場の準備の都合上、参加希望の方は研究会代表の池田忍までご連絡いただくと幸いです。
 shinobu-ikeda@chiba-u.jp *件名にシンポジウム参加希望と記入いただくと幸いです。当日都合がつかないでご参加くださる方は、連絡不要です。そのままご参加ください。

プログラム

趣旨説明：池田 忍（千葉大学・文学部教員 美術史・表象文化研究） 13：00～13：10

報告：13：10～16：00（休憩を含む）

1. 展示空間のポリティクス
山崎 明子（奈良女子大学・研究院生活環境科学系教員 美術史・表象文化研究）
2. アイヌ伝統文化の今日的継承とアイヌ・アート —ミュージアムの役割を中心に—
吉原 秀喜（平取町アイヌ文化保全対策室室長）
3. アイヌ・アートと「伝統」 —木彫り熊とイクパスイ
五十嵐 聡美（北海道立帯広美術館学芸課長）
（休憩）
4. イラスト表現の可能性 小笠原 小夜（イラストレーター）
5. 見たい・作りたい・広めたい個人の視点から
高橋 桂（マーケティング・コミュニケーター）
6. アイヌ・アート研究のこれから —表現される「歴史」と「物語」への応答
池田 忍
（休憩）

パネルディスカッション 16：00～17：30

貝澤 徹（美術家・二風谷在住）
 吉田 憲司（国立民族学博物館教授）
 各報告者、会場の皆さん



参加費無料

どなたでも参加いただけます





開催趣旨

近年、アイヌ文化への注目や関心は日本でのみならず、世界的な高まりをみせています。特にアートは、言語文化や音楽と並んでその創造と発信に取り組むアイヌの人々の強い想いと呼応するように、多くの人々を惹きつけながら状況が大きく動いていると言えます。

2013年に発足した私たちの研究プロジェクトは、北海道内と、首都圏や関西に在住するメンバーが協働して、アイヌ・アートの制作と展示／販売が、今、どのような場で、誰を担い手として、どのようにおこなわれているのかを実見・調査してきました。また、「アイヌ・アート」とここでひとまず括っている造形作品が、実は現在の社会では「工芸」、「民芸」、「手芸」、「美術」、あるいは「アート」というように、展示や販売、受容の場に応じて呼び分けられ、その呼称に応じた意味づけがなされていることに目を向けました。上記の呼称や枠組みは流動的なものであり、イラストやアニメーションといったジャンルにも、アイヌ・アートは大きく広がっています。しかし見ていくうちに、このような“活況”の傍らで、たとえば後継者不足、材料確保や商品の質・流通管理の問題、展示の場の固定化、批評の不足など、乗り越えるべき多くの課題が横たわっている現状に改めて直面しました。しかもこうした問題は、必ずしもアイヌ・アートに固有ではありません。日本各地の伝統工芸、あるいは風土や暮らしに根ざしたクラフト、手芸、あるいは現代美術が共通して抱えるものではないかと思いついたのです。「伝統」の素晴らしさが語られ、その継承がうたわれますが、何をもって「伝統」とするのか、その今日的な継承は誰が、どこで担うのか、享受者は何を求めているのか。こうした共通の問いを、アイヌ・アートを中核にしながら、グローバルな現代社会の課題としてひらいてみたいのです。

そこでこのシンポジウムでは、これまでの調査研究を通じて得た知見を提示し、広い視野からのコメントを得て、アイヌ・アートにかかわり、関心を寄せる多くの方々と討議の場を共有したいと思います。目指すところは、アイヌ・アートの深化、認知と評価の高まりを通じて、異なる経験を負って今を生きる人々が共感する社会の創造です。

